

歌誌 黄雞 七十巻記念「饗宴」投稿歌三十首 (＊..写真短歌)

山形短歌会 ○黒沼 貞志

歌題 アンソロジー(平成三十年歌誌黄雞夏号掲載)

壁いちめん覆い尽くせり春の薔薇主の想いを語り咲きおり(＊)

昼深し手入れの庭に夏匂い手掛けし主の思い漂う(＊)

昼下がりに夢路に届く郭公の鳴き声幽か小暑のうたた寝

散歩道出会いし父娘の朝練の励む姿に朝日射しをり

歳かさね暑さ身にしむ梅雨盛り髪すく妻にカット勧めん

山麓のコスモス畑に踏み入りて遊ぶ夫婦にたそがれは来ぬ(＊)

ゴミを出し戻りの路の足先に伸びたる影は秋へのきざはし

「おはよう」と吐く息白き隊列の子らに重なる我が学童期

夕立の校門前に車列なす下校の光景様変わりけり

薄ら日はこの地と等しく微笑むかかの地はいまだ除染に喘ぐ

夏ちかし山並み白雲菜の畑薫風の中墓並びをり(＊)

秋浅き日の斑つらなる山の路踏む松落葉足に優しき

黄昏れる岸辺の雪にかまくらの灯影連なりミニ天の川

ほろ苦き期待をこめて札狙う中学最後のかるた大会

アンソロジー我が歩み記す一冊の無事の入稿誰に伝えん

歌題 「Hell on earth」 (平成三十年歌誌黄雞秋号掲載)

風に乗り庭に届きしもみじ葉のおしろい粧う初霜の朝

朝ぼらけ弥生最後のなごり雪外山も白く斑に染まる

窓越しの光をまとう木蓮にそつと声かけ春をうかがう (＊)

バス車中翁嫗で賑わえり訛り飛び交うクラス会の旅

午の春土手に群れ咲く山吹の花をそよがす風吹き降りき (＊)

記念日を夫婦で祝うレストラン話す相手はスマホの向こう

主菓子が届く父の日薄茶たて小意気に過してメールで返礼

幾千の彼岸の兄の蝶たちが特別展に舞い降りにけり

老いの知恵友を見舞いて湧き出でて妻の浴後にわれ床につく

城跡に春を探せば花筏花のさかりはよべの夢の中 (＊)

うつし世の虚栄の極みかフォロワーが売り買いされるインスタグラム

冬五輪熱氣過ぎ去り我が日々三十一文字の時間戻りき

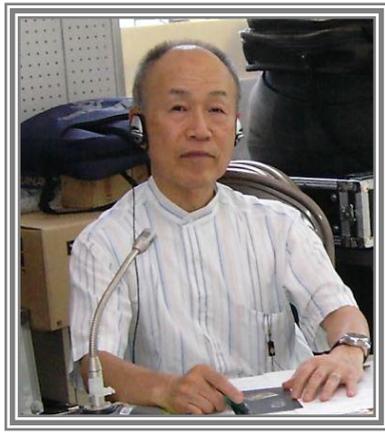
七年目記事の弱まる震災の私の記憶は 「Hell on earth」

阿久悠のニュース短歌を試みて没後十年オマージュとせん

久々にぎっくり腰で床につき無為の時間を作歌にあてり

詠者プロフィール

(写真)



(住所) 山形市西田

(入社年月日) 平成二十九年五月